

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

文化のパターン分析：旅の歌昭和史

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/00005925 |

文化のパターン分析

—旅の歌昭和史—

旅の歌の枠組み

以前から筆者は世相・風俗に興味があり、その変遷と社会情勢・事件との相関をできるだけ客観的な手法で分析してみたいと考えている。風呂敷を広げるならば、文化のパターン分析を行ってみようという訳である。その一環として、たまたま親交のある観光人類学者からの示唆があり、また、自身「なつメロ」好きであることも手伝って、昭和歌謡曲を「旅の歌」という切り口から歌詞分析することになった。本稿では、その結果の概略を紹介してみたい。

筆者は、歌われる旅を、「行く旅」「帰る旅」「さすらいの旅」という、次の三つの枠組みで考えることにした。「行く旅」は、未知の世界へ向かう未来志向のもので、「憧れ」を動機とする。「帰る旅」は過去志向で、しばしば「郷愁」と結びつく。「さすらいの旅」は、故郷、安住・安定の地、希望の満たされる地、などを求めるが得られない、という状況

を表す旅で、広い意味での「郷愁」と結びつく。

このような三つの旅という枠組みに沿って、昭和ヒット・レコードを題材として分析を行った。なぜならば、歌謡史を振り返る際にしばしば陥りがちな「自分史に引きつけた分析」という弊から逃れ、できるだけ客観的な分析を行いたいと考えたためである。しかし、様々な情報メディアが発達した現在、歌謡曲の流行をシングル・レコードの売上げだけで把握することはおのずから無理がある。特に、シングルではなくアルバムが主体であるニューミュージックについての分析が不十分であることをあらかじめ断っておきたい。

地名入り歌謡曲の消長

近代的レコード産業が成立したのは昭和初期であったが、これらレコード会社は、「都会賛美調」、「地方賛美調」、「股旅やくざもの」などの「旅の歌」を大量に生み出し始めた。

久保正敏

「都会賛美調」と「地方賛美調」の歌謡曲流行の背景には当時の都会—地方の対立関係があり、「股旅やくざもの」流行の背景には、金融恐慌、農村の疲弊、軍部の影とあった社会不安があつたことを考え合わせると、昭和歌謡曲は「旅の歌」から始まつた、と言つても過言ではない。

これを端的に示しているのが地名入り歌謡曲、すなわち一般に「ご当地ソング」と呼ばれる歌謡曲の出現率である。地名が入つた歌謡曲の全てが旅に関係するとは必ずしも言えないが、一つの指標として取り上げてみた。「全首歌謡曲大全集」に収録されている、一九八七年前半までの昭和ヒット歌謡曲二七〇八曲の中から、歌詞に地名が含まれているか、あるいは明らかに地域が推測できるもの五四六曲を選び出し、ほぼ五年刻みの各期間において、総歌謡曲に占める割合、すなわち出現率を計算した。その出現率の推移を眺めてみると、昭和初期には総ヒット歌謡曲の四〇%が地名入り歌謡曲であり、昭和歌謡曲は旅の歌から始まつた、と述べたことを裏付けている。

歌われる地域の変遷も含めて、地名だけでなく風物描写の含まれる歌謡曲を旅の歌と考へて、その変遷をたどつてみよう。昭和初期には「都会賛美調」(道頓堀行進曲、東京行進曲など)の舞台としての東京、京都、大阪や、大正期の新民謡運動を引き継いだ観光歌謡としての「地方賛美調」(波浮の港、茶切節など)の舞台としての湘南、伊豆、箱根など首都圏周辺

観光地、など、地域は限定されていた。

一九三二年の満州事変、翌年の第一次上海事変を契機とする戦線拡大に伴つて、満州を舞台とする「曠野もの」(国境の町など)といった陸軍の「北進論」に対応するものや、海軍の「南進論」に対応するジャワ、タイ、上海などの「現地もの」(上海の花売り娘、ジャワのマング売りなど)が増えるとともに、民衆の社会不安を反映した「マドロスもの」(博多ブルース、別れ船など)や「股旅やくざもの」(赤城の子守唄、大利根月夜など)の舞台としての利根、潮来、博多、上州、信州などが増えてくる。

敗戦直後の時期、歌われる土地は東京に集中する。敗戦東京の現実を直視し哀感こめて歌う「現実悲観調」(星の流れになど)と、戦争が終わつたという解放感や戦前東京を懐古する「現実楽観調」(東京プギウギ、夢淡き東京など)に大別できる。一九五五年から一九六四年の時期には、経済復興、高度経済成長を反映し、復興したモダン東京を賛美する「モダン東京賛美調」(有楽町で逢いましょう、西銀座歌前など)の歌や、地方から都会への大規模な人口移動を背景に「都会—地方交流」の歌(リンゴ村から、別れの一本杉など)が現れた。特に、都会への憧れと郷愁が交錯して歌われる後者のタイプが頻出した。

この時期、地名入り歌謡曲の出現率も戦後期のピークを示し、これは人口移動と強い相関を持っている。国勢調査の

「人口移動」統計から、南関東、中京、西近畿などの大都市圏への人口流入を算出してみると、この時期の推移曲線が地名入り歌謡曲出現率の推移曲線と見事にマッチするのである。

一九六五年以降、都会への人口流入がピークを過ぎると、今度は地方の歌が増え始める。現在と同じように、当時も都会への集中の反動として地方分散や地方復権が叫ばれたが、歌の世界でも「ご当地ソング」という言葉が生まれるなど、歌われる地域の分散現象が見られる。しかし、この時期には全国的に都会化が進行し、都会—地方の対立関係はもはや消滅したために、昭和初期に見られたような地方の風物を風情豊かに賛美する歌が少なくなつて、恋物語の背景としてのみ土地の風物が歌われるタイプの歌が多くなつてくる。ネオン街の女性の悲恋を歌う「ネオン艶歌」(柳ヶ瀬ブルース、盛り場ブルースなど)、別れた恋人に対する「別れと未練の歌」(函館の女、長崎ブルースなど)、昔の恋人をしのぶ「慕情の歌」(北上夜曲、小樽のひとよなど)が、地方を舞台に登場する。

一九七〇年の大阪万博以降、「ディスカバー・ジャパン」など、若い女性をターゲットとする旅行ブームが仕掛けられ、「ふるさと再発見もの」(わたしの城下町、瀬戸の花嫁など)や「京都もの」(京都慕情、京のわか雨など)が流行を見せる。一九七五年頃以降の旅の歌謡曲は、恋人との別れや未練を歌う演歌(北の宿から、みちのくひとり旅など)と、ニューミュ

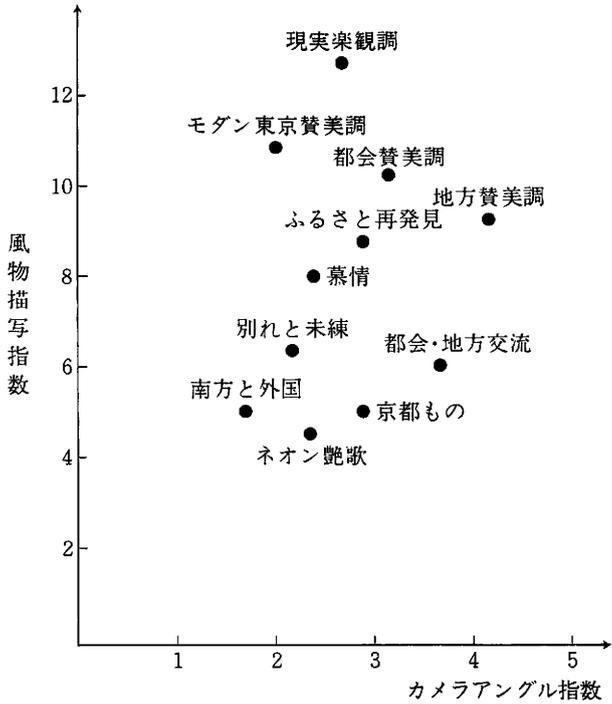
ージックやアイドル歌謡(青い珊瑚礁、サザン・ウインドなど)に大別できる。前者は殆ど北方を舞台とし、後者は海外旅行の日常化を反映してイメージとしての南方や様々な外国を舞台とする、という大きな特徴がある。

もう一つ注目すべき点は、映画やテレビ、グラビア雑誌など、視覚メディアが与えるイメージが旅の動機付けの主役を担うようになったため、歌謡曲の持つメッセージ性が低下してきたことである。イメージの先行は、旅行の意味にも変化を及ぼしている。旅行とは、様々なメディアによって既に自分の内部に作り上げられたイメージを現地ににかけて確認する行為なのであって、新たな発見や感動は最初から期待されていないのである。メッセージの歌からイメージの歌への変化は、地名を特定せずイメージを喚起する歌の増加、歌詞における風物描写の減少、などの点に現れている。現在は、旅が歌謡曲のモチーフとして成立しにくくなった時代なのかもしれない。

旅の歌のジャンルの変遷

このことを、一種の歌詞のモデル化によって確認してみよう。これまで述べてきた旅の歌のジャンル分類にあたって筆者が注目したのは、憧れ、郷愁、慕情、未練などの心情モチーフの他に、風物描写程度、登場人物などの特徴パラメータである。風物描写程度は、視覚的、聴覚的なものを示す名詞

が歌詞に出現する数をあて、これを風物描写指数とする。
 登場人物については、歌詞に一人称のみ登場するものに1、二人称まで登場するものに2、あの子、あの人など過去の恋人を三人称で呼ぶものに3、肉親や友人が登場するものに4、没交渉の第三者のみ登場するものに5、とそれぞれの



旅の歌の特徴空間

歌に得点を与え、これをカメラアングル指数と呼ぶことにする。なぜなら、歌詞のストーリーを映画化すると考えた場合、得点が小さな歌は描写の焦点が自分に近い、いわばクローズ・ショットの画面であり、逆に得点の大きなものは遠くに焦点のあるロング・ショットの画面作りに対応すると考えられるからである。

これら二つのパラメータを用いて、旅の歌のジャンルの特徴空間を描いてみたのが上図である。いくつかの興味ある事実が指摘できるが、特に注目したいのは、図の右上から左下への時間的な変遷である。すなわち、ロング・ショットの歌からクローズ・ショットの歌への変化、風物をメッセージとして含む歌から恋の歌への変化が読み取れることである。これは、歌謡曲が社会的メッセージ性を弱め、私生活中心主義のものへと変化してきたことを物語っているように思われる。このことと、地名入り歌謡曲出現率の低下とを合わせて考えれば、現在は、移動としての旅の歌が成立しにくくなった時代であると言える。

心の旅の分析に向けて

以上は、空間的移動としての旅に着目した分析であるが、時間的移動としての旅、いわば心の旅路に関する歌も日本人の好きなジャンルであろう。例えば青春時代を回顧する歌も、自分自身の過去への旅を歌っていると思えることがでけるから、おそらく時間的な帰る旅も、歌謡曲の中でかなり大きな割合を占めると考えられ、先述した私生活中心へのシフトに伴って、それらの数が増加しつつあることが予想される。

帰る旅は「ふるさと」と結びついている。ここで、生まれ育った土地として「ふるさと」を捉えるだけでなく、永遠に帰れない場所、あるいは過去、果たせなかつた若い日の夢、精神的安住の地、などへも拡大解釈し、これらをモチーフと

する歌を分析してみれば、日本人にとって広い意味での「ふるさと観」はどのように変遷しているのか、を論じることが出来るかも知れない。他民族文化との比較も含めてこのような方向へ展開できたら、と考えている。

こうした分析作業は、基本的にコンピュータ処理によって進めていくが、ここで注意したいのは、歌詞という一次情報を単にデータベース化しただけでは不十分なことである。それを如何にモデル化して二次情報を引き出すか、そして、それらをどのように数値化していくかが、人文社会科学の研究におけるコンピュータ利用の鍵である。この点にも配慮しながら、人文社会科学へのコンピュータ応用を考えて行きたい。

(京都大学大型計算機センター助教授・京大・工・昭47)

信山社

出版研究サービスの

(洋書・古書のご相談・制作出版)

ご案内



◆学術書出版・教材出版のご相談は信山社へ◆

各種論文集の編集から制作販売まで一貫してお引受け致します。
博士論文・修士論文はもとより、長い間のご研究成果をまとめるお手伝いを致します。助成研究等の報告書も作成・販売致します。
信山社出版研究サービスは、ご研究に必要なあらゆるサービスを提供します(学会事務・学会誌刊行・広告募集・講演会事務等)。

◎小社は、(株)信山社サイテック・京都信山社・大阪信山社・盛岡信山社出版版口モーシヨンと協力して、ご満足いただける本作りを致します。

*案内書を進呈致します。ハガキ又はFAXでご請求下さい。

〒113 東京都文京区本郷6-2-9-102

信山社出版サービス

* 目録・資料呈*

(担当 袖山)

TEL 03(3818) 1019 FAX 03(3818) 0344